エチオピア，Awash川下りの旅

香本 佳彦 [1)]

キーワード：アフリカ，エチオピア，大地溝帯，川下り，Awash川

1. はじめに

2005年，私は北海道大学理学部地球科学科の三回生であった．当時，学業に対する目的意識を持てずにいた私は，進学して卒業研究に取り組もうという前向きな気持ちを全く失っていた．その年，日々刻々と過ぎてゆく現実から逃れるように，私は休学することを決めた．

どこか遠くへ行ってみようか….

どこかと言ったらアフリカしかない．なぜかそう思った．そして，アフリカのどこかで川下りをしよう．気に入ったところで，ボートを膨らませ，好きなところまで川を下る．そんな自由な旅ができたら，それがアフリカなら，最高の旅になるに違いない．ただ，一口にアフリカと言っても，あまりに広大である．さて，どのあたりを目指せばよいだろうか．

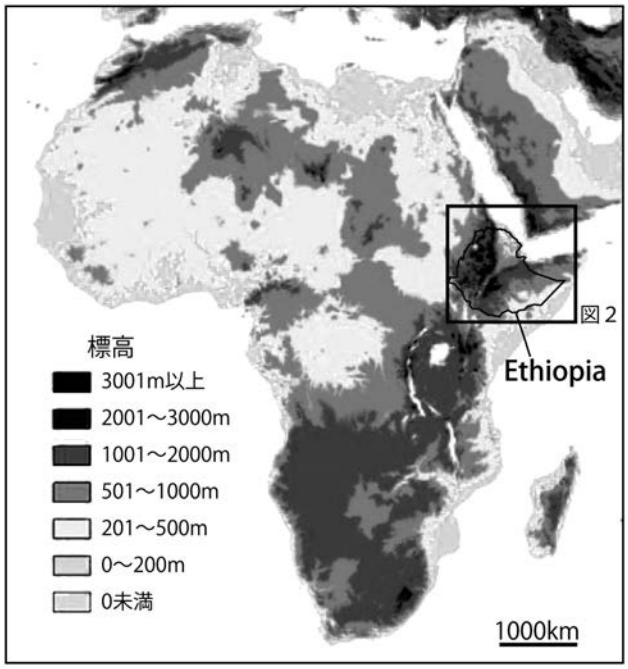

図1　アフリカ大陸の標高地図．エチオピア高原の起伏が突出している．基図は地理院地図（電子国土Web）ズームレベル3，地球地図（標高）を使用．

探検スタイルのボートは急流向き，つまり安定性は高い反面，推進力は弱く川の流れを利用することが前提の舟である．それを考慮すれば，行き先は大河ではなく，まず地形の起伏のある場所を探すべきだろう．

そこで，改めて部室（探検部）にあった世界地図でアフリカ大陸の地形を見みてみると，標高の高いエリアは概ね東海岸に沿って南北に，すなわちアフリカ大地溝帯に沿って分布している（図1）．中でも大地溝帯北部に，明らかに起伏の卓越した地域がある．それはエチオピアである．こうして大体の行先が決まった．あとは，風の吹くまま，気の向くままでいいだろう．

結局，実際には，エジプトからアフリカ大陸に上陸し，スーダン，エチオピア，飛んでカメルーンという国々を旅行した．本稿ではその中から，エチオピアでの川下りと，その前後のエピソードを紹介する．

2. エチオピア入国

2. 1. 砂漠から緑の国へ

国境へ向かうピックアップトラックは，もの凄い土埃を巻き上げながら荒野を駆けてゆく．荷台の揺れ方はすさまじく，しっかりつかまっていないと飛び出してしまいそうだ．スーダン国境の町ガダレフからエチオピアへ向かう道は，みるみる高度を上げ，1日の間に灼熱の砂漠地帯から緑の高地へと景色を変える．エチオピアの国境はそんな自然環境の変遷で縁取られ，私が通過した北西側の国境では文化や生活様式までもが変化してゆくのを目の当たりにした．アフリカ大陸によく見られる定規で引いたような国境線と違い，この国境は由緒正しい境界線といえるかもしれない．

国境を越えると主な宗教はキリスト教に変わる．つまり，エジプト，スーダンと約一ヶ月の間我慢していた，冷えたビールが堂々といただけるというわけだ．パスポートにスタンプをもらい表へ出ると，同じタイミングで国境を越えた面々が乾杯をしている．私もそこへ混ぜてもらい，小瓶を一気に飲み干して，皆でハイタッチ．言葉は分からないが，国境通過の喜びを分かち合った．

2. 2. 川下りはどの川で？

国境から首都アジスアベバへは，寄り道をしながら2週間ほどかけて到着した．アジスアベバへ着いたら，いよいよどこで川下りをするのか決めようと思っていた．

早速，私はアジスアベバ大学へ向かい，理学部教授のマレク氏を訪ねることにした．マレク氏とは，エチオピア入国の数日後に北部の青ナイル川（実は元々ここを下るつもりだった）の有名な滝で偶然に出会い，その後約一週間，私の希望でエチオピア北部のシメン国立公園での彼のフィールドワークに同行させてもらったという仲である．毎晩，若干空気の薄い高地でへべれけになるまで酒を飲み交わし，私の川下りについてもよく理解してくれていた．

1）株式会社蒜山地質年代学研究所　神戸支店　〒652-0813　神戸市兵庫区兵庫町1丁目3-28（komoto@geohiruzen.co.jp）

「私の専門は植物学だが，エチオピアの自然のことなら何でも聞きなさい．君の川下りの助けにもなれるだろう．」

数日前のこの言葉を真に受けて研究室を訪ねると，マレク氏は親切にもアジスアベバ大学の博物館を案内してくれた．

マレク氏はフィールドワークで国中を周っており，エチオピアでの野外活動において注意すべきことを熟知していた．川の周辺では「カバがとにかく危険」なのだという．博物館の展示品の5m程のワニの剥製には血の気が引いたが，実際の被害としてはカバの方が多いということであった．

また彼は，世界的に有名ないわゆる「ルーシー」（展示はレプリカ）をはじめ，エチオピアにおける人類の起源・進化に関する重要な発見について熱く語ってくれた．この時，それらの発見の多くは，Awash川（図2）という川の中流から下流に集中していることを初めて知った．

マレク氏の熱弁にすっかり感動し，博物館を出るころには，アフリカで最初に下る川はAwash川の他にない，という気持ちになっていた．

「マレク教授．僕はAwash川をボートで下ってみようと思います．」

「OK，ワカ（ワカとは私の探検部でのあだ名で，外国では本名の発音が難しいため代わりにこう名乗っていた）．Awash川ならここからそう遠くないし，いいかもしれな．しかし，下流の国立公園の近くはカバやワニの非常に多いエリアだ．それに日が沈むとハイエナの群れが荒野を徘徊する．十分気を付けなさい．困ったら地元の人に助けて求めなさい．いいね，ワカ．」

「わかりました．今日は本当にありがとうございました．」

「グッドラック！」

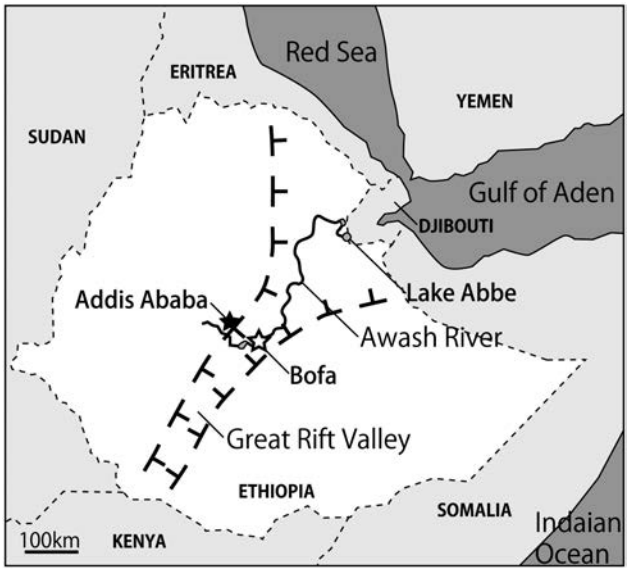

図2　Awash川はエチオピアの中央部付近からアフリカ大地溝帯と平行して南西から北東方向に流れ，最後はアファール低地のアッベ湖に消える．基図はテキサス大学図書館HPで公開の「U. S. CIA, Country Maps, Ethiopia (physiography) 2000」を使用．

2. 3. 川下りの準備

行先が決まれば，準備開始である．主な準備は食料調達と言語習得だ．

私はまず，東アフリカ最大といわれる巨大市場マルカートへ向かった．コメやパスタなどの保存可能な炭水化物と，塩や固形スープなどの調味料を入手した．その他，野菜や果物は直前に購入，たんぱく質は現地調達でいいだろう．

それで帰ればよかったのに，せっかくだからと市場の奥へ足を踏み入れたのがよくなかった．なんと白昼堂々3人組の窃盗グループに襲われ，防水仕様のデジタルカメラを奪われてしまったのである．しばらくは取り返そうと躍起になったが，言葉のわからない外国人には無謀なこととあきらめ，カメラ屋でYASHICAというメーカーの一番安いコンパクトカメラを購入した．この事件にはすっかり気持ちが落ち込んでしまった．

食料の現地調達はテストが必要だ．川下りのスタート地点の下見も兼ね，川沿いの数か所を訪れた．どこも水量が少なくパッとしないので，徐々に下流へと足を延ばし，エチオピアでは有名な温泉地ソドレへやってきた．温泉施設は浴槽・打たせ湯・温泉プールなどなかなかの充実ぶりで，一部は湯治にも利用されているようだ．入浴後，芝生に寝転がりうとうとしていると，目の前に大勢のサル（テナガザルの仲間？）が現れた．彼らは湯あがりにくつろぐ人々の食べ物を次々に奪っていった．ビンのジュースをラッパ飲みする者までいたのには驚いた．

昼寝を切り上げ温泉施設の裏の川へ向かう．川には地元のおじさんが一人糸を垂れていた．私が日本から持ってきた釣り竿を伸ばすと，おじさんは興味津々で話しかけてきた．ほとんどわからなかったが，「魚」「沢山」だけは聞き取れた．彼の仕掛けは，大ぶりな釣り針を太いテグスの先に結び，重りの代わりに石ころを巻きつけた簡単なものある．餌は鶏のくず肉を使用していた．

さて，おじさんの仕掛けを参考に自分の仕掛けで試してみる．水深は大体1mといったところか．おじさんに分けてもらった餌を投入して待つこと約3分，40cm程のナマズを釣りあげた．となりでおじさんもボチボチ釣り上げており，食料の現地調達に対する不安はほとんど無くなった．水量，流速ともにまずまずなこともあり，ここをスタート地点にすることにした．

首都アジスアベバの夜は言語習得に費やした．これまでの道のりでも，マレク氏のような英語の話せるインテリにちょくちょくアムハラ語を教えてもらっていたのだが，ここでは川下りの時に使えそうな言葉の収集が一番の目的だ．毎晩酒場を徘徊し，インテリの入っていそうな落ち着いた（といっても，基本的に大音量でエチオピア歌謡が流れている）店で，暇で親切そうな紳士を見つけては声をかけ，一緒に飲みながらアムハラ語を教えてもらった．数日の間に，ノートには思った以上の単語を加えることができた．

2. 4. 川下り初日

Awash 川下り初日の朝，さっそく河原でボートを膨らませていると，近所の若者が数人集まってきた．皆，見慣れぬ外国人とボムボートに興味津々である．若者たちは

「俺も．俺も．」

と競うようにフイゴを奪い合い，あっという間にボートを膨らませてしまった．そして予想通り，

「ちょっと遊んでもいいだろ？」

と期待した顔で皆が私を見つめる．「ノー．」とは言えない雰囲気である．

「いいよ．」

早速，大はしゃぎで一人用ボートに 3 人で乗り込むと，あっという間に転覆した．そして，ボートと 3 人はみるみる流され，川のカーブの向こうに消えてしまった．

これはまずい．他のメンバーの肩をたたき，「なんとかしてくれよ！」と顔で訴えるが，彼らも「困ったよね．」と他人事のような顔を返してくる．しょうがないので急いで追いかけようとしたとき，下流の方から

「はっはっはっはっ！」

と掛け声が聞こえてきた．流された 3 人が頭にボートを載せて元気よく帰ってきた．なんとか出発前にボートを失うことだけは避けられたようだ．

その後，不公平になるので他のメンバーも遊ばせていると，誰かが投網を持ってきた．手作りの小さな投網だが，私自身の興味もあり，私の操船で淵に向かい投げさせてみた．投網を上げてみると，小さな網いっぱいに魚が入っているではないか．陸に上げてみると，大きいもので体長 30cm 程度のややスマートなフナのような魚であった．若者たちは歓喜に沸き立った．その後，二人で協力して何度か投網を打ち，結局 20 匹ほどの大漁となった．

とれた魚は皆で早速食べることになった．近所の子どもをパシリに使い，バルバリという唐辛子などのスパイスと塩を混ぜた調味料を買ってこさせた．皆おもむろにかじりつき，皮を引きちぎって内臓を除くと，バルバリをかけ，生のままむしゃぶりついた．

「うまそうだけど，お腹大丈夫かな？」

結局，彼らがあまりにうまそうに食べるので，私も試しに食べることにした．一応，寄生虫の恐れがあると思い，無駄な抵抗とは承知の上でよく噛んで食べた．するとこれが意外にいける．しかし，その味以上に驚きなのは，生魚を食べる文化である．ただ，今回の旅を通して魚を生食する人には後にも先にも出会うことはなく，エチオピアでも一般的ではないだろう．

2. 5. いよいよ

腹ごしらえも済んだところで，出発することにする．アムハラ語で細かい説明などできないので，魚を一匹手にとり，

「これ，イェネ　アサ（俺の魚）．デナデル，ワデンニャ（お休み，友よ）．」

と舟に飛び乗った．

ところが，漕ぎ出したとたん，彼らも岸を追いかけてくるではないか．さすがにこれ以上遊んでいては日が暮れてしまうので，手を振って先を目指す．川の流れが速くなり始めるとボートは加速し，一人また一人と追うのをあきらめていく．一方，今度は対岸から何かが私を追いかけている．サルの群れだ．温泉の周りの林からやってきたのだろう．川の流れは徐々に速くなり，人もサルもじきに姿が見えなくなった．

濁った水は静かにボートを運んでゆく．雲ひとつ無い青空に，茶色く乾いた大地．下流を見渡せば，川の両岸だけが延々細い緑に縁取られている．水は生命の源なのだと改めて感じる．

やがて流れが緩くなると共に，緑が濃くなり，川は影で暗くなってきた．なんとなく危険な雰囲気を感じて，できるだけ気配を消す．

ジャポン！

何かが水に落ちる音がした．なんだろう．私はナイフを手に神経を張り詰める．折り畳みの小さなナイフでも，丸腰よりマシだと自分を励ます．なんとも安らかではないが，ボートは少しずつ流されていく．そして，とうとうあの動物が姿を現した．

「うわー，出たよ…ワニちゃん．」

水面にも，岸にも，よく見ると結構な数がいるではないか．張り詰める空気の中，ボートは流れ，徐々に間合いが詰まってゆく．向こうもこちらを見ているようだ．次の一瞬，

ジャポン！

一番近くの岸にワニが川に飛び込んだ．それにつられてか，次から次へと濁った川へと姿を消していく．向かってくるのか，逃げて行ったのか．私は小さなナイフを握りしめ息を殺し，ついさっきまでワニが群れていた場所をゆっくりと通過してゆく．何も起こらない．その後もワニは断続的に現れるが，姿を消した後はやはり何も起こらなかった．

じきにワニにも見慣れて，恐怖の対象ではなくなった．むしろ突然の不審者に驚かされたのは彼らの方だったのかもしれない．そう思ったら，ワニに出会うたびに申し訳ない気持ちになった．

2. 6. 最初の仲間

ワニの多いエリアを抜けると，人の集団が見えてきた．洗濯や水汲みなどをしているようだ．

「デナネ（こんにちは）！」

挨拶をしてみるが，突然の不審者に皆硬直してしまっている．それでも笑顔で上陸すると，同世代と思しき青年が一人歩み出て握手に応じてくれた．そして危険がないと分かった途端，子ども達も一斉に握手を求めてきた（図 3）．

しばらくして，また出発する準備をはじめると，一人のおじさんが私に向かって何かいっている．ジェスチャーから察するに「俺も一緒に乗っけていけ．」というようなことを言っているようだ．

「大きなワニがいるよ．」

と私がいうと．

「ああ，ワニはこの棒でこうだ！」

と，大げさに杖を振り回し笑っている．こうして，川下り

図3　Awash川で地元住民と記念撮影．川は生活の場になっている．

に初めての仲間が出来た．自己紹介を互いの言語で行い，舟に乗り込んだ．

川を下っている最中，おじさんは色々と周辺のことについて説明してくれた．ほとんど意味が分からなかったが，にぎやかで楽しい二人旅である．あっという間に2時間ほどが過ぎた．

野外活動で一番大切なことは，日が沈む前にその日寝る場所を確保することである．夕方5時頃，ちょうどテントを張るのに良さそうな場所を見つけたので，上陸してキャンプの準備に取り掛かる．おじさんがテントを張るのを手伝ってくれたので，たき火で湯を沸かしお茶をごちそうした．夕暮れの別れ際，おじさんは私を心配してくれているようだったのだが，相変わらず細かいことは何も分からなかった．

「アムサゲナッロ．イェネワデンニャ．（ありがとう．我が友よ．）」

固く握手をして別れた．いよいよ一人のキャンプが始まるのだ．

2.7. 長い夜

夜，活発に動き回る野生動物から身を守る一番の方法は焚き火だろう．明るいうちにできるだけ多くの薪を確保しなければならないが，あたりは植生も乏しく状況は厳しい．

日が沈み始めると一気に気温が下がり，川風に草や木の葉がしきりに音を立てる．十分な薪が確保できたとは言えないが，暗くなる前に夕食の準備に取り掛かることにした．さて，夕食の献立は魚にジャガイモ，玉ねぎのバルバリ雑炊である．我ながら悪くない味であった．

すっかり日が沈み，見上げれば満天の星空である．星明かりでそれなりに見通しがきくのがかえって不気味に感じる．人の目でこれだけ見えるのなら，実はすでに何かに狙われていたりして…．気配を感じたような気がして何度振り向いてみても，それは風の音である．暗くなると聴覚が敏感になるのは人に残された野生の本能なのだろうか．頼りの焚き火を絶やさぬよう，できるだけ薪を節約して火の番を続けた．

夜が更けるにつれ，いよいよ風が強くなり，とうとう命の焚き火を消して，テントに入る．テントは時折，叩きつけるような烈風にバタバタとあおられる．なかなか寝付けないが何もできることはないので，とにかく目を閉じて時間が過ぎるのを待ってみる．しばらくすると，風の音に混じって犬の遠吠えのような音が聞こえた．

「ハイエナちゃんではありませんように….」

恐怖心の紛らわそうと独り言をつぶやいている内，いつの間にか眠りに落ちていた．

2.8. 川下り2日目スタート

5時半，目が覚めるがあたりはまだ薄暗く，朝の冷え込みは厳しい．焚き火を起こし，お茶を入れ，バナナを食べる．そうこうしている間にも対岸に8人もの人が集まってきた．焚き火の煙に気がついたのだろう．挨拶をしたが反応は薄く，少し二度寝をしたら居なくなっていた．

7時，ボートの空気を入れ直し，荷物をまとめる．いよいよ2日目の川下りの始まりだ．

顔でも洗おうと水際にしゃがみ込んだその時である．

ブシュ！

音のする方へ目を向けると，5mほど先で大きな目と鼻がこちらへ向いている（図4）．

「…！（カバだ！）」

頭の先まで緊張が走り，目が合ったまま身動きが取れない．そのまま数秒間の静寂が過ぎた．カバは何事も無かったかのように上流と歩き，静かに濁った川へと消えていった．そこにはゆらゆらと水面の揺らぎだけが残っている．

しばし放心の後，私は無意識に少し高いところへと駆け上がり，あたりを見渡した．しかし，カバの姿はどこにもない．一瞬でも相手がその気になったら自分の命は危なかっただろう．細胞の一つ一つがそう感じているかのように，全身の毛が逆立ったままだ．しばらくの間，私は呆然と川を眺めていた．

さて，気を取り直して川下り2日目の始まりだ．カバと出会った場所がスタート地点である．“今朝の”がまだ近くにいるかもしれないし，他にも仲間がいるかもしれない．ともかく，今日も漕ぎ出すことにした．全神経を最大限張り詰めて，私はゆっくりと漕いで行く．あらゆる水面の動きが，水中を泳ぐカバを想わせる．

もし目の前にカバが突然現れたら？

どこに潜むか分からないカバの恐怖は，急流以外ではずっと続くに違いない．こんな状況ではすぐに神経がすり減ってしまう．朝から悲壮感でため息が続く．

新しい仲間と出会ったのはそんな時である．

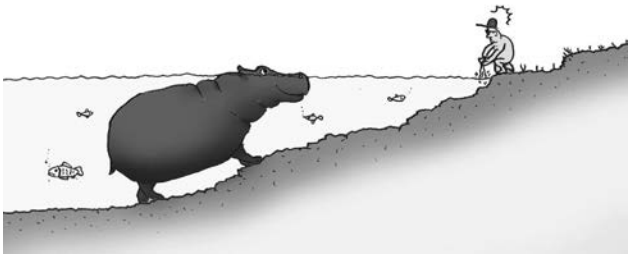

図4　わずか5mほどでカバと対面．

2. 9. 新しい仲間

川幅が広がり谷も開けてきた．そして，物音．目をやると，斜面の上には4人の子ども達がいた．

「おーい！おーい！」

ちょうど人恋しかった私は，大きな声で呼びかけた．子供たちは走って追いかけてくる．上陸して話でもしたかったのだが，その時ボートはまさに早瀬に突入しようとしていた．とりあえず，手を振ってから操船に集中する．瀬にカバはいないだろうが，瀬の後には必ずトロ場が待っているものだ．もしそこにカバがいるとしたら，体一つでジャバジャバ泳ぐのはまっぴらゴメンである．

無事に瀬を越えると，広いトロ場へ出た．彼らはどうしただろうと岸を探すと，一人が先回りしてきていた．うれしくなり手を振ると，彼は岸を走りながら服を脱ぎ川へ飛び込んだ．そして頭の上に服を乗せ，ボートへ泳いでやってきた．少し戸惑ったが，この状況で乗せないわけにはいかないだろう．ひとまず彼を引き上げ，挨拶を交わす．やはり英語は分からないようなので，片言のアムハラ語で会話を試みた．新しい仲間の名前は“クバ”で，年齢は17歳だそうだ．

クバと2人乗りになってから段々と谷が狭くなってきた．いよいよ私のボートが本領を発揮する急流が現れ始める．最初の大きな瀬では，クバは必死の形相で舟にしがみついていた．私にとっては漕ぎ慣れた荒瀬も，彼にとっては恐怖体験でしかないようだ．それ以降，瀬が近づくたびに，

「ワカ，ノー！」

といって，一人上陸するようになった．そして，どうにかして瀬の先まで走って岩場を乗り越え，そこでまた合流するのだ．

また，周辺住人の水場を通過するときには，毎回クバが大人たちから周辺情報を聞きだしてくれた．そして，危ない場所では必ず前もって教えてくれた．地元民であり，優秀な水先案内人のクバが仲間になったことで，カバやワニといった危険生物に対しても，俄然楽観的になることができた．

途中，クバと私は良さげなポイントを見つけては何度か釣りをした．瀬は危険個所である一方，下流のトロ場との境界付近では釣り場として期待できる．食料調達は重要なミッションであり，可能性があれば即トライである．クバはぶっこみ釣り，私は浮き釣りだ．餌はクバの持っていたパンの切れ端を使った．どのポイントでも短時間で大抵1，2匹は釣ることができたが，道具の性能の圧倒的な違いもあって，ほぼ私の釣果（ちょうか）であった．

2. 10. 滝だ！

午後3時ごろ，通りかかった水場でクバがいつも通り情報収集を行っている．しかし，今回はみんなの表情が真剣だ．この先に何かあるらしい．

「ワカ，ザ（向こう），NO！」

ジェスチャーは明らかに滝のようなものを表現している．滝としてもどの程度なのかが分からない．

「イッシ．（わかったよ）」

その後，少し進むと瀬が見えてきた．クバがボートの上で立ち上がり，先を見つめる．

「ワカ！ワカ！NO！NO！」

クバの様子がただ事ではない．私も立ち上がって見ると，瀬の先で谷は狭まり，水面が途切れている．滝だ．それも思っていたよりかなり本格的な滝である．即座に急旋回し岸へ上陸する．

「ひゃー，危なかった．クバ，アムサゲナッロ（ありがとう）．」

クバもほっとした表情である．下流の状況を確認しようと，二人で滝の横の崖に立つ（図5）．滝壺は激しく泡立ち，両岸とも切り立った崖をなす．しかも滝は2段構えである．危ないところだった．もしそのまま突っ込んでいたら，ライフジャケットを着ていた私ともかく，クバは怪我で済まなかったかもしれない．

この滝を回避するにはしばらく下流へ歩く必要がある．時間的にはそろそろキャンプ地を決めなければならないタイミングである．クバが心配そうに私を見つめる．彼の村は上流方向だろうから，もうお別れだ．たった一日の付き合いだったけど，何だか無性に寂しい気がする．

「クバ，ありがとう．俺はあっちに歩いていくよ．君はあっちだろ？」

「ワカはドニに行くのか？ドニ，NO．あっち，ボファ，OK．俺，ボファ．」

なるほど．川の下流へ行くとドニという町があり，山の方へ行くとボファという町があるらしい．そして，クバはボファから来たようだ．当然下流へ行くつもりだが，せっかく仲良くなったクバの住んでいる町を見てみるのも悪くない．しかもここからボファは近いので，すぐに着くという．そういうことならとクバに付いて行くことにした．

ボファへ到着したころにはすっかり真っ暗になっていた．上陸してから3時間以上，重たいボートを担ぎ，早足で歩き続けてもうヘトヘトだ．小さな宿へ案内され，直ぐに眠りについた．

図5　行く手を滝に阻まれる．

3. ボファ村

3. 1. ファレンジ！

朝起きるとあたりが異様に騒々しいのに気が付いた．部屋を出ると，宿の入り口や窓といったあらゆる隙間が村人で埋め尽くされているではないか．どうもお目当ては私の様である．

ファレンジ（日本語でいう外人）・ボンド・ジャッキー・ジェットリーなど，村人からの呼びかけは様々だ．騒ぎを聞きつけてか，そこへ警官らしき恰好をした男がホテルに入ってきた．男は厳しい表情で手招きしている．面倒なことにならなければよいが，と思いつつ男についてゆくと，そこは小さな小屋で机が一つと椅子が二つある．

「ポリス？」

一応聞いてみると，男は静かにうなずいた．それから警官の尋問が始まるのだが，彼は英語がほとんど分からないため，お互いにイライラが募る．小屋の周囲を埋め尽くす村人たちも，初めは固唾（かたず）をのんで見守っていたが，徐々に騒がしくなってきた．

そこへ一人の女性が現れ，流暢な英語でこう言った．

「こんにちは，ワデナシ･カバダと言います．この村で幼稚園の教師をしています．私が通訳をしましょう．」

会話が成立することで警官も落ち着きを取り戻し，尋問が仕切りなおされることになった．この後，この尋問は思わぬ展開を迎えることになる．

「名前は？」

「ワカです．」

この時も，いつものように探検部でのあだ名「ワカ」を名乗ったのだが，今回はすぐに周りの反応に違和感を感じた．

まず目の前のワデナシが目を大きく見開いてこちらを見つめている．そして，彼女はゆっくりと口を開き，こう言った．

「Waka is ･･･GOD!」

ワデナシが警官に私の名前を告げると，外で聞いていた野次馬たちも「ワカ，ワカ．」とざわつき始めた．

初めは意味が分からなかったが，どうも「ワカ」とはこの地域の古い土着信仰上の「神」を意味する言葉らしい．ワデナシは私の手を取ると，こう続けた．

「ワカ．あなたに敵でないことは，私にはわかります．心配しないで．警官には私から説明しましょう．」

ワデナシは，しばし警官と話をして，話の要点を英語にしてくれた．まとめると，①観光目的と言っておきながらボートでこんな田舎に来るのはおかしい，②カバやワニのいる川をボートで下ったのなら，安全のため違法に銃を持っているはずである，しかも，③川は途中に流れの激しいところがあり，ボートで下ったなど信じられない，ということらしい．

さて，①はワデナシがうまいこと説明をしてくれたらしい．②は荷物をすべて出して見せ，直接警官に調べさせ，納得してもらうことができた．ただ，「カバやワニに対してそんな小さなナイフは意味を成さない．」とのことである．これはごもっとも．問題は③である．これは，急流下りというスポーツの存在を知らなければ，なかなか説明が難しい．そこで百聞は一見にしかず，ということで，外に出てボートを膨らませることにした．

外へ出ると，私の周りには半径2m程の空間を保ち，人の輪ができた．ボートを膨らませると，私はワデナシにパドルを渡す．

「乗ってみて下さい．乗れば，どんな急流でも大丈夫だと分かりますよ．」

ワデナシはワカバカ丸に乗り込むと，

「ハハーン…OK．I understand!」

と大喜び（図6）．すぐさま警官に乗り心地を力説し，警官も彼女の勢いに負けた形で，

「ワカ，you, no problem.」

と，ついに無罪放免となった．

3. 2. 彼女の理由

ワデナシにつれられ宿に戻ると，彼女は少し興奮した様子で話を始めた．

「ワカ．この村では昨日からあなたの噂で持ちきりでした．あなたを川で見かけた男が，『川で赤い舟に乗ったボンドを見た．』と噂を流したのです．」

「ボンド？まさか，ジェームス・ボンドですか？」

「ジェームス・ボンド？知りませんが，ボンドはインド映画のアクション俳優だそうです．」

「はぁ，インド人ですか…（どこがインド人に見えたんだ？）．」

「ワカ．聞いて下さい．実は，あなたがこの村へ来るまでの約一か月，私は毎日のように外国人と二人で歩く夢を見ました．そこで先日，村の教会の神父さんに相談に行くと，神父さんはこう言われました．『その夢は，いつの日か誰かがあなたの元に現れることを暗示しています．信じれば，神がいつか夢に出てきたファレンジをあなたの息子としてお導きになるでしょう．』．そして今日，日本人の“神”という名の若者は，小さなボートで，武器も持たずにあの危険な川からやってきました．何の共通点もないあなたと私が，今日こうして出会ったことは，神のお導きとしか考えられません．あなたは神が私に授けた息子です．私はそう信じます．オー，ワカ！マイサン！」

図6　ボートに群がるBofa村人達．乗っているのがワデナシとその甥．

今朝，初対面の私のことを不自然なほどに好意的に解釈してくれたのはこういうことだったのである．いきなり息子と言われても困ってしまうが，不思議な縁を感じたことは確かである．

そのとき，私の中で一つのアイデアが浮かんでいた．ここを拠点に，地域の人や文化を知る，地域の生活に飛び込んでみる．実はこれも自分がこの旅に求めていたものの一つだったのかもしれない．せっかくなので，しばらく腰を落ち着けてみることにした．

3. 3. 村の暮らし

その日から，私はとりあえず川下りを置いておいて，村を拠点に面白そうなモノにどんどん頭を突っ込んでみることにした．ワデナシの通訳で村のおばさん達にお願いし，伝統的な発酵食品である主食のインジェラや酒の製造方法を教えてもらった．また，家畜の遊牧や炭焼きなど，様々な職業の人について村の周辺を歩き回った．

そんな風に村で時間を過ごすうち，私はワデナシの姪のウォルキーエ（17 歳）に気に入られたらしい．ワデナシの通訳のおかげもあっただろう．ある時は，「あなたが毎日汚れていくのが悲しい．」などと言い，貴重な水を使って服を洗濯してくれ，またある時は，水を張ったタライで私の足を手洗いしてくれた．これはあちら風の愛情表現らしい．

彼女と一緒に食事をするときは，（これはエチオピアでは友達レベルでもするのだが）いつも食べ物を手に取って私の口に運んでくれ，いつしか食事のほとんどをお互いに手で食べさせ合うようになった．

日本で女子にモテた経験の無い私にとって，もはや幸せいっぱいの新婚気分であった．ある日，膝枕をねだられ，自分の膝で気持ちよさそうに鼻歌を歌う彼女を眺めながら，いっそエチオピアに暮らしたほうが幸せなのではないだろうか，本気でそう思ったのである．しかし，楽しい時間も長くは続かない．パスポートに刻まれたビザの期限が近づいていた．

3. 4. アフリカよ，さらば

ビザを延長してここに残るべきか，新たな旅に出るべきか，私が選んだのは後者である．所詮，私は旅人なのだ．ウォルキーエともこれ以上の仲になる前にお別れするべきなのだと思った．

私は村の人たちに数日中に戻ると告げ，いったん町へ出て次の旅路の支度をした．やはり残るべきかな，という気持ちを振り払うことができぬまま，ともかく出発の日を決めた．

いよいよエチオピアを離れる前日，私は村へ別れの挨拶に戻ってきた．その日は，村のお世話になった人たちがみんな集まってくれた．

「ワデナシ．いままで本当にありがとう．ところでウォルキーエは？」

「それが…，宿で働いているアシャナフィは知ってるわよね？」

「ああ，知ってるけど？」

「今は彼と付き合ってるみたい．」

「え？えー！」

思わぬ展開に混乱してしまったが，目の前で別れを惜しんでくれている村の人たちと最後の言葉を交わす．

町へ向かう乗り合いバスの運転手が，「そろそろだ．」と合図を送ってきた．

「ここでのことは忘れません．みんな本当にありがとう．さようなら，さようなら…」

これで良かったんだ．そうだ，いちばんいい形で出発できたじゃないか．そう，きっとあれはいい夢だったんだ．

乗合バスが動き出すと，みんなの姿はあっという間に土埃の中に消えていった．

4. おわりに

その後，日本に帰った私は復学し，二枚貝の研究で卒業論文を書いた．そのまま修士へ進学するも，修士 2 年の春，私なりに色々な思いを抱え，修士課程を中退した．中退後は，ロープを使った急傾斜地の調査を得意とする会社や田舎の鍛冶屋で働くが，いずれも長くは続かなかった．

蒜山地質年代学研究所へは，修士の中退を含めれば 3 度目の転職といってもいいかもしれない．定まらない生き方をしてきた自分だが，そんな過去でも生かすことができれば財産だ．今，そのための準備を会社のサポートを受け始めたところである．先の話になるが，10 年後の 30 周年記念に，その歩みを振り返ることを楽しみにしたい．

2015 年 5 月 11 日受付，2015 年 6 月 8 日受理．

Engineering Geology of Japan, No. 5, 'The special issue of 20th anniversary of Hiruzen Institute for Geology and Chronology', 201-207 (2015)

A boat travel at the Awash river, Ethiopia

Yoshihiko Komoto[1)]

[1)] Kobe branch, Hiruzen Institute for Geology and Chronology, Co., Ltd., 1-3-28 Hyogocho, Hyogo-ku, Kobe 652-0813, Japan

© 2015 Hiruzen Institute for Geology and Chronology. All rights reserved.